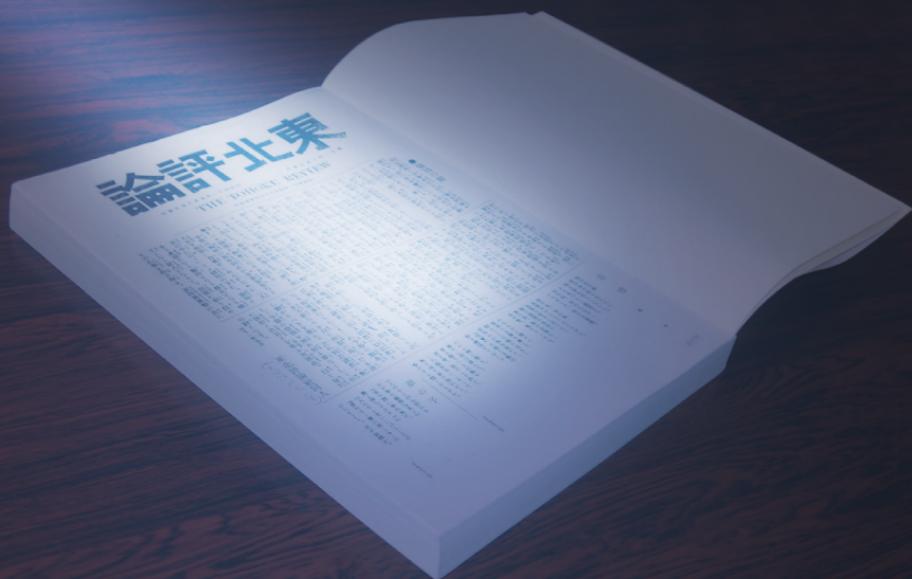


# 大逆事件余波と群馬(上)

～東北評論からの出発～



石山幸弘著

みやま文庫

はじめに —『東北評論』からの出発—ということ

一九一〇（明治四三）年九月から一月にかけ、前橋を中心に開催された一府一四県連合共進会は、六〇日間の会期中、およそ一一三万人超の人々で溢れ、政府肝入りの祭典は、一地方都市に世上の不景気を吹き飛ばしてくれそうな期待感を与えたのでした。

ところが、そのお祭り騒ぎの渦中で、密かにある国家的な事件捜査の手が群馬県下に伸びていました。その事件とは「刑法第七十三条ノ罪被告事件」、のちに大逆事件と呼ばれるもので、幸いに県下からは右の罪状該当者は出ませんでした。が、捜査の過程で別件の刑法第七十四条に抵触するとして数人が裁判にかけられることになりました。これは皇室に対して失礼があったという罪（不敬罪）ですが、戦後は民主主義とは相容れないという理由で廃止されています。

皇室に対し失礼があったといっても、友人への手紙文中の文言であつたり、あるいは偽名を用いた未知の人物から郵送されて来たパンフレットを落掌当日、偶然訪れた友人二人に計三部、内容をよく吟味しないまま手渡したことが不穩文書の「頒布」とされたもの、あるいは友人の偽証によってアメリカから送られて来た不敬文書のうち一枚を、別の友人に手渡したとされたものなどです。ことさら大量に印刷物を作り頒布したというのではなく、しかも「頒布」事実があつて

からおよそ二年後に罪を問われたのでした。裁判の結果、懲役刑や禁錮刑を四〜五年科せられ前橋監獄に下獄することになります。

知られるようにこの「刑法第七十三ノ罪条被告事件」は、当時の日本の思想界を厚い黒雲で覆う「冬の時代」を作りだし、社会全体を閉塞感に追い込みました。石川啄木はこの時代を告発して「A LETTER FROM PRISON」に付帯して「EDITORS NOTES」その他を世に遺したことはあまりにも有名です。萩原朔太郎も従兄の萩原栄次宛に原稿用紙にして八二枚にも及ぶ手紙の中でこの事件に触れ、憂いを深くしていました。

本書の上・下二巻はこの事件の余波がなぜ群馬に及んだのかを見て行くことを目的にしています。見えてきたのは事件より丁度二年前の一九〇八（明治四一）年五月一五日、『東北評論』という初期社会主義啓蒙紙ともいうべきものが、啄木や朔太郎らと同年代の青年によつて高崎で創刊され、その印刷名義人に事件の中核を担ったとされる長野県出身の青年がいたことから、群馬が関係先として捜査対象地になったのでした。そうであるなら、僅か通巻四号で出版弾圧で潰えた『東北評論』という刊行物は、そもそもどんな経緯を経て刊行されたのか、その舞台裏の人間像を知ることは、この事件余波が群馬に及んだ実態理解のために欠かせないことがらだと思われまます。本冊（上巻）を『大逆事件余波と群馬―東北評論』からの出発―とした由縁です。執筆の基本資料は、同紙の同人だった前橋郊外の一農村青年阿部米太郎が遺した、同人たちからの書簡

を基礎にしています。二十代前半の彼らが言論弾圧を掻い潜り、私事を棚上げして天下を憂えた熱情と、それを支えた友情には、今日の私たちに訴えかけてくるものがあります。事件余波の中心部分については下巻に譲ります。

(著者 識)

# 目次

はじめに —『東北評論』からの出発—ということ

## 序章

- 一 『東北評論』と大逆事件の群馬余波……………三
- 二 不敬罪事件の見直し検証……………四
- 三 明治三五年に現われた「論説 社会主義」……………五
- 四 歴史が教えるもの……………八

## 第一章 新思想の種 山本耕造「社会主義」論

—前橋中学校校友会誌『坂東太郎』三四号—

- 第一節 『東北評論』への萌芽 前橋中学校雑誌部の面々……………三
- 第二節 楽水子山本耕造の論説「社会主義」……………七
- 第三節 山本耕造に於ける文芸意識……………二〇

第四節	山本耕造の来歴	二四
(一)	前橋中学校赴任 — 「月手当金四拾五円給与」 —	二四
(二)	山本耕造の辞職	二八
(三)	その後の山本耕造 — 戦時の上林高等女学校長（熊本）時代 —	三三
第五節	論説「社会主義」執筆の時代背景	三六
(一)	明治三五年の群馬	三六
(二)	木下尚江演説会	四〇
第六節	前橋中学校のストライキと山本耕造	四三
(一)	新しい潮流	四七
(二)	遅れを取るまいとする青年客気	四七
第七節	論説「社会主義」の種本	四九
(一)	幸徳秋水『廿世紀之怪物帝国主義』と煙山専太郎『近世無政府主義』の検討	四九
(二)	田島錦治著『近世社会主義論（第一編）』の検討	五三
(三)	山本耕三の置き土産『社会学』なるもの	六〇
第八節	山本耕造の社会主義受容	六五
(一)	リチャード・イリー原著『近世社会主義論』第一編第一章「緒言」要約	六五